

山首上人さまご講演

現世安穩・後生善処

げんぜあんのん
ごしょうぜんしよ

いちにちいちぜん
一日一善



「トサミズキ」

魂たましは永遠えいえんに続つづきます

一日いちにちいちぜん一善

一日いちにちいちぜん一善を積めば

一年ねんには三百六十五善ぜんとなる。

常つねに他たを喜よろこばせば、

自然しぜんに我わが身みに喜よろこびは満みち、

愚痴ぐちは消けされる。

慈悲めぐむ・持戒よきおこない・忍辱かんにんの修行しゆぎやうは、

現世安穩げんぜあんのん・後生善処ごしよぜんしよの大事だいじの道みちである。

|| 御開山上人御法話資料 ||

「一日いちにちいちぜん一善」はよく知しられた言葉ことばでありま

すが、一日いちにちにごはんを一いぜん頂いたくゝとい

うのではありません。一日いちにちに一ついいこと

をする、ということです。

いいこととは、常つねに他たを喜よろこばせゝとあ

りますように、自分じぶんのできることことで人ひとを喜よろこ

ばせてゆくことです。一緒いっしょに住すむ人ひと、自分じぶん

の身近みぢかにいる人ひとを、言葉ことばで、行おこないで喜よろこば

せることが「一善ぜん」となるのです。自分じぶんの

喜びのために何かをするというのは、一善とはなりません。

一日に一ついいことをすれば当然、一年には三百六十五善となります。しかし人生ですから、一悪とまではゆかなくても、知らず知らずのうちに人を困らせていたということはあります。

言葉は人を喜ばせる力がありますが、反面、相手を傷つけて罪を作ることもあります。行ないも、いいと思っただけが、おせっかいと取られて逆効果となることもあります。差し引きするとどうなので

しょう。一年間に積んだ善と、知らず知らずといえども出来てしまった悪を相殺するとうなるかわからないというのでは心配です。いいことだけを一日一つするというのは、簡単なようでむづかしいことも知れません。

人を喜ばせることが大切と言われるのは、私共が法華経を信仰しているからです。始祖の杉山先生は、法音寺に縁を結ぶ者は菩薩行をするために生きている、と言われました。菩薩行とは、自分が生きることによってまわりの人が喜び、利益を得るよう

にすることです。そのために私共は生きて
いるのです。

では、自分のことはどうなるのか、とい
うことですが、自分は、人を喜ばせた余慶
の功德を頂いて喜びを得る、というのです。

ですから一日一善などと遠慮せずに二善、

三善といいことを積み重ねてゆくとい
います。それだけ喜びが大きくなります

から、一人でも多くの人に喜んでもらえ
よう、努力してゆきたいものであります。

菩薩行はどこまでも、人を喜ばせること
によって自分の喜びとする、世界でありま

すから、自分が嬉しいということだけを目
的とした行ないは、本当の喜びにはつな
が
りません。

家族の中で自分一人だけ嬉しがっている
も、主人や奥さんや子どもが悲しんでいた
ら、心から喜べないでしょう。また、自分
だけおいしい物を食べていて、あとの人は
食べられないとしたら、みんなの顔色もよ
くないでしょう。やはり家族みんなが同じ
喜びを共有できるのでなければいけません。
まわりの人の喜ぶことをしてゆくと、自
分の喜びになると同時に心が広くなります。

しかし、自分のことばかりを先に考えてゆくと次第に心は狭くなります。

心が狭くなると金平糖のようにトゲが生えて来ますから、あちこちに引つ掛かりやすくなります。爪が割れると洋服を着替える時などすぐ引つ掛かって苦労しますが、それと同じように、ちょっとしたことにもすぐ引つ掛かって愚痴が出るのです。トゲをなくして少しでも心を丸くし、引つ掛かりをなくしたいものであります。

心が広くなると、自分がしなければならぬことが見えてくるようになります。そ

れは自分の役割であり、使命とも言えます。自分本位の狭い考えにとらわれていると、いったい自分は何をしなければならぬのかがわかりません。オレガオレガという心は、自分自身を見えにくくしますから、さらに悪いことが目につくようになり、愚痴も出やすくなるのです。

愚痴は、言わなくてもいいこと、言っても仕方のないことをグチグチ言うことです。それは決して「善」に結びつきません。少しでも人の喜ぶことをして、愚痴の心が消えるよう努力しましょう。

慈悲・持戒・忍辱の修行は、現世安穩・

後生善処の大事の道である

めぐむ慈悲は功德となる行ないです。

慈悲の慈と悲にはそれぞれ異なった意味

があります。慈は慈しむ、つまり、人を喜

ばせることで、悲は、人の悲しみを取って

あげることです。この二つが合わさって慈

悲となるのです。人の悲しみがわかるから、

慈しむ、施しが出来るのです。

ただ、めったやたらに施しをするのがい

いかどうかはわかりません。

本当に徳となる慈悲は、相手が望むこと

をしてあげることです。ただしそれが、単

に欲望を満たすだけのものであったり、そ

のことによって結果が悪くなるのではない

ません。相手の人がやがて菩薩行に目覚め

るような慈悲を施してゆきたいものであり

ます。

よくおこない慈悲の戒は戒めで

あります。これはこうしなければいけない

いということではなく、自分がこうし

ようと考えてすることです。自分に足り

ないと思うことがあったら、その足りない

ところを補なってゆくのです。すぐ愚痴の

出^でそ^うな^{ひと}人^は、せ^きめ^{よう}て^{にちぐち}今日^{きよう}一^{いち}日^{にち}愚^ぐ痴^ちを^い言^わない^{ひと}よう^はに^{ひと}し^{ひと}よう^はと^{ひと}誓^{ちか}い、怒^{おこ}り^{ひと}や^{ひと}す^{ひと}い^{ひと}人^は、今日^{きよう}一^{いち}日^{にち}〳〵堪^{かん}忍^{にん}〳〵忍^{にん}辱^{にく}〳〵を^{まも}守^もろ^もう^もと^{ちか}誓^{ちか}つて^{ひと}ゆ^{ひと}く^{ひと}の^{ひと}で^{ひと}す。

い^いこ^こを^{つづ}続^{つづ}け^にる^にの^にが^に人^に間^{げん}は^に苦^に手^てで^です。

し^しか^しし、そ^その^{ひと}人^{ひと}の^{せいしつ}性^{せいしつ}質^{しつ}に^にも^もよ^より^りま^ます^すが、す^すぐ^ぐ怒^{おこ}る^{ひと}人^{ひと}、愚^ぐ痴^ちば^ばか^かり^い言^いつ^つて^いる^{ひと}人^{ひと}で^でも、た^たと^とえ^えば^ば一^じ時^{かん}間^{かん}だ^だけ^けな^なら^らガ^ガマ^マン^ン出^で来^きる^るか^かも^も知^しれ^れま^ませ^せん。そ^そう^うし^して^て次^{つぎ}に^に、二^じ時^{かん}間^{かん}、三^{さん}時^じ間^{かん}、半^{はん}日^{にち}と^と、少^{すこ}し^しず^ずつ^の伸^のば^ばし^して^てゆ^ゆけ^けば^ばや^やが^がて^て、一^{いち}日^{にち}ガ^ガマ^マン^ン出^で来^きる^るよう^{よう}に^にな^なる^るか^かも^も知^しれ^れま^ませ^せん。そ^そう^うな^なれ^れば^ば大^{だい}成^{せい}功^{こう}で^です。

で^では、明^あ日^すか^から^らは^はど^どう^うす^すれ^れば、と^とい^いう^うこ^こと^とで^です^すが、実^{じつ}は^は〳〵明^あ日^すの^のこ^こは^は今^{いま}は^は考^かえ^えな^なく^くて^てい^いい。明^あ日^すに^にな^なつ^つて^て考^{かん}え^えれ^れば^ばい^い〳〵と^と教^{おし}え^えら^られる^るの^ので^です。そ^そう^うし^して^て明^あ日^すに^にな^なつ^つた^たら^ら今^{こん}度^どは^は日^ひ替^がわ^わり^りラ^ラン^ンチ^チで^では^はあ^あり^りま^ませ^せん^んが、目^め先^{さき}を^を変^かえ^えて^て〳〵昨^{きのう}日^うは^は一^{いち}日^{にち}愚^ぐ痴^ちを^を言^いわ^わな^ない^いよう^{よう}に^に頑^{がん}張^ばつ^つた^たか^から、今^{きよう}日^うは^は腹^{はら}を^を立^たて^てな^ない^いよう^{よう}に^にし^して^てゆ^ゆこ^こう^う〳〵と^と誓^{ちか}つ^つて^てゆ^ゆく^くの^ので^です。そ^そう^うす^する^ると^と気^き分^{ぶん}も^も変^かわ^わつ^つて、何^{なん}と^とか^か一^{いち}日^{にち}で^でき^きる^るよう^{よう}に^にな^なる^るだ^だら^らう^うと^と思^{おも}い^いま^ます。『現^{げん}世^ぜ安^{あん}穩^ん』は、今^{きよう}日^う一^{いち}日^{にち}を^を一^{いっ}番^{ばん}い^い状^{じょう}態^{たい}で^で生^いき^きる^るこ^こと^とで^です。そ^その^のよう^{よう}に^にし^して^て毎^{まい}日^{にち}、

愚痴を言わず、腹も立てず心安らかに生きてゆかれたら、言うことありません。

このようにお話しすると、〃一日安らかに過ごすには、ある程度のお金が必要〃と言う人がいるかも知れません。しかし、お金があればいいかというと、そうばかりとは言えません。お金があっても病氣ばかりしていたら安心はありません。体は丈夫でも、心配なことが目の前にあつたら、現世安穩とはなりません。どういう状態の中にあつても穏やかに生きてゆくことを、現世安穩というのです。

「後生善処」は来世のことです。来世もまた安らかに過ごせたら結構なことです。しかし〃来世なんてあるかわからないことを心配しても仕方がない〃と言われるかも知れません。たしかに、来世に行つて帰つた人は今まで誰もいませんから、来世はないかも知れません。なければいいのですが、もしあつたら困ります。地獄もなく、閻魔様もないとなれば心配事も一つ二つ減りますが、もしあつたらその時〃これは困つた〃ということになって、余計苦しまなければなりません。その苦しみ

は自分持ちです。来世があってもいいように、万全を期しておく必要があります。

私もあの世のことは知りませんが、「後生善処」が「後生地獄」となつては困ります。

人間の肉体は今世でなくなりますが、魂は来世までずっと続くと教えるのが法華経です。

少し前までアメリカで活躍されていた精神科医、エリザベス・キューブラー・ロスという方が、
肉体は今世で終わるけど、魂は永遠に続く。人が生きるのは、その魂

を無限に向上させるため、ということを言われました。来世もまた、自分を向上させようと言われるのです。

この心は法華経の説く「菩薩行の実行」と同じです。今世で足りない分、来世また励みましよう、修行しましよう、ということです。ロス医師が法華経を研究されたかどうか知りませんが、科学者でこういうことを言われる人はめずらしいと思います。

このように考えて、いろいろな形で善を重ねてゆかれたら、今世も来世も安心して生きてゆかれるに違いありません。